

蒲江町深島・屋形島・名護屋地域の鳥類

武石 宣彰

はじめに

蒲江町深島、屋形島、名護屋地域は、大分県の最南端に位置し、その自然環境は豊かな照葉樹林に支えられて、多様性に富む生態系を形作っている。しかし、近年の植林による林相の単一化、リゾート、観光目的の開発等による自然破壊が懸念されている。

名護屋地域の森林部に於いては、ワシタカ類を頂点とし照葉樹林に生息するメジロ、ヒヨドリ等の留鳥がこれらの生態系を形作っている。深島、屋形島は渡り鳥の通過のメインストリート豊後水道に位置し、春と秋の渡りのシーズンには餌の補給と休息に、そして時には荒天時の避難場所として多くの渡り鳥が立ち寄り、離島特有の鳥相を呈している。

この地域は過去、日豊海岸国定公園学術調査や大分県野鳥友の会による深島の夏期調査が行われているが、今回は深島、屋形島、名護屋地域に調査地を絞り、四季を通じた調査を行うことにより、この地域に於ける鳥類の生息状況を明らかにする。

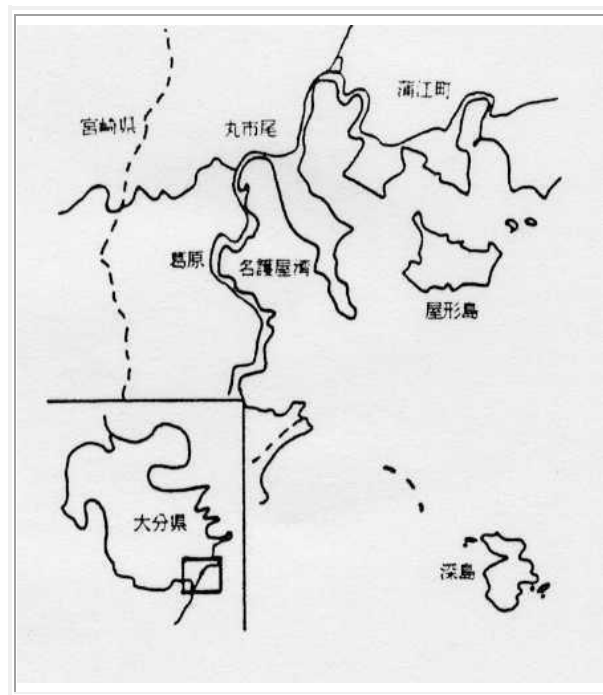


図1 調査地域

調査地

調査地を決定するに当たり、予備調査を行い調査対象地域の自然環境を代表する場所として、下記のように選定した。

深 島

調査コース：港から灯台迄の島内の道路 約 1.5 Km

深島は蒲江港から南へ9 Kmの海上に位置する周囲4 Km、面積1.1 Km²のひょうたん形をした、人口57人（'93.9.）の島である。調査コースを設定した島南部の尾根部にはマツ林や竹林が分布し、谷部にはタブ林とスギの人工林が見られる。

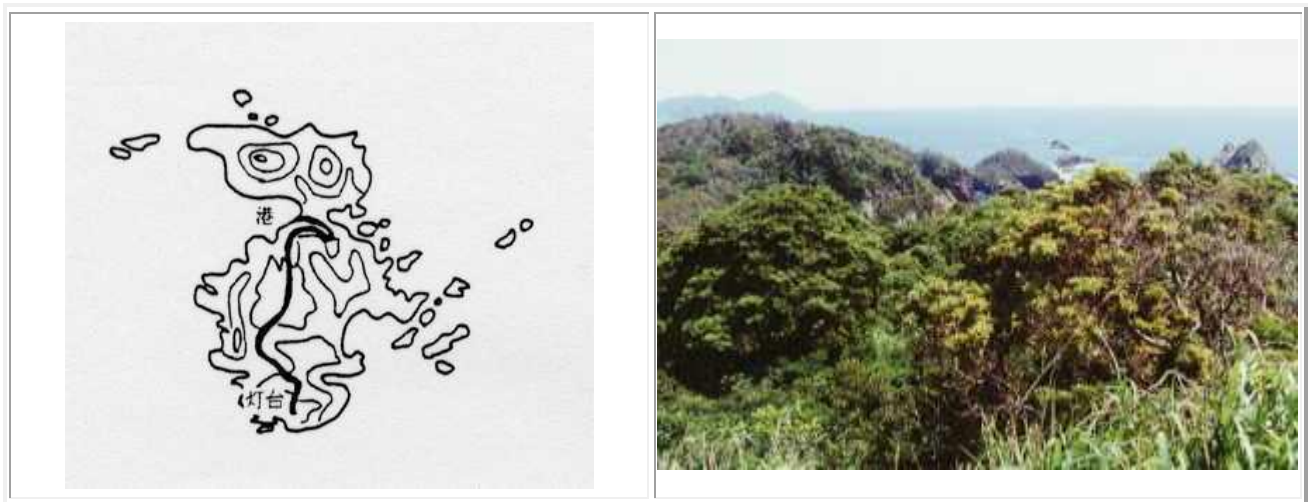


図2 深島

屋形島

調査コース：港から洲の浜を回る海岸部 約 1.4 Km

屋形島は蒲江港から南へ2 Kmの海上に位置する周囲3 Km、面積1.2 Km²、人口75人（'93.9.）の島である。調査コースの島の北側には磯、西側には砂浜が広がっている。島の林部はタブ林の中にスギ、ヒノキの人工林が有り、砂浜との間には湿地も見られた。

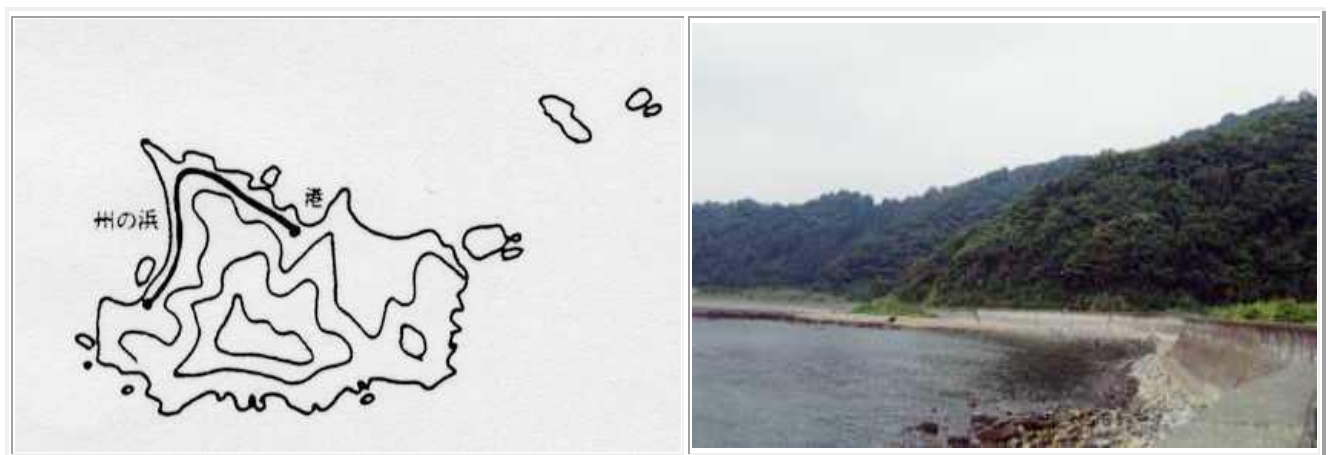


図3 屋形島

名護屋地域

葛原林道

調査コース：大内川上流沿の林道 約 1.8 Km

大内川上流 2 Km を始点とする林道で、スギ、ヒノキの人工林と一部竹林からシイ、カシの広葉樹が広がっており、谷をはさんで向かい側の斜面は針広混交林である。標高は始点 10 m、終点 200 m である。



図 4 名護屋地域（写真 葛原林道）

葛原旧道

調査コース：県道丸市尾・葛原線の旧道 約 1.6 Km

海岸沿いの斜面を通る道路で、通常は車や人の通行はほとんど無い。広葉樹が広がる中に、一部スギ、ヒノキの人工林が見られる。9月の台風で県道が通行止めとなり、12月迄の約4ヶ月間迂回路として旧道が使用され車の通行量が増加した。

葛原海岸部

調査コース：県道丸市尾・葛原線沿の海岸部 約 1.5 Km

海岸部は一部砂浜があるもののほとんどは磯で、名護屋湾の海上には魚類の養殖生け簀が多数見られる。



写真 葛原旧道

写真 葛原海岸部

調 査 方 法

調査方法はラインセンサス法を用い、調査地を時速約1.5 Kmで歩いて、両側及び上空に出現する鳥類をカウントした。但し、葛原海岸部は道路より海側の海岸部、及び海上をカウントした。このラインセンサス以外に補足調査として、10月11日に深島にてタカの渡り調査、11月14日に深島、屋形島周辺、及び名護屋湾の海上調査を船上より行った。又、11月20日には葛原、波当津周辺の補足調査を行った。

調査用具には、双眼鏡（8倍）、望遠鏡（20倍）、カウンター、カメラ、時計、地図などを用いた。

調 査 結 果

調査地域全体では 13目29科5亜科75種の鳥類を確認した。その鳥類目録を表1に示す。

調査地別の結果は次の通りである。

深島は12回の調査を行い8目19科4亜科37種を確認した。

屋形島は10回の調査を行い9目21科2亜科42種を確認した。

葛原林道は8回の調査を行い8目17科4亜科30種を確認した。

葛原旧道は8回の調査を行い5目17科3亜科25種を確認した。

葛原海岸は8回の調査を行い7目12科1亜科22種を確認した。

考 察

'93年5月より'94年1月迄行った深島、屋形島、名護屋地域の鳥類調査で13目29科75種の鳥類を確認した。過去、大分県内では18目60科288種の鳥類が記録されている。('92年4月現在)深島、屋形島、名護屋地域の目別種数構成は大分県全体と比較すると、スズメ目、ワシタカ目の構成比が高く、チドリ目、ガンカモ目が低くなっている。このことから、この地域は照葉樹林に生息する小鳥類や、渡りの途中に立ち寄る小鳥類が多く、又これを狙ってタカ類の出現の多いことがうかがえる。反面、海辺や河口に干潟が無く、又大きな河川や湖が無い為シギ・チドリ類やガン・カモ類が少なくなっている。

調査地別の特徴について以下に考察を行う。

深島ではトビ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、ハシボソガラス、ハシブトガラスが100%の出現率を示している。優占度は、春期にはカワラヒワ、ウグイス、ヒヨドリが上位を占め、夏期にはこれに繁殖の為に渡ってきたアマツバメが加わる。秋から冬にかけては、ツバメやアマツバメが南へ帰り、カワラヒワも島から姿を消す。この為、個体数が急に減少しトビ、ウグイス、ヒヨドリなどが優占種となる。

種数は、春と秋の渡りのシーズンに一時的に増加する。これは、豊後水道を渡る小鳥類が休息や採餌の為、又時には荒天時の避難場所としてこの島に立ち寄るからであろう。

ここで注目すべきは、カラスバトとカワラヒワの個体数変化である。この2種は共に留鳥として、一定の生息地から移動しないと考えられているが、夏以降個体数が急激に減少し、秋から冬にかけては姿を見かけなくなる。明らかに島外へ移動していると思われるが、今回は単年の調査であり移動を断定するにはさらに調査を続ける必要がある。

深島では国の天然記念物で「絶滅するおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(以下「種の保存法」と言う)の危急種に指定されているカラスバトの繁殖期に於ける出現率が高く、島内で繁殖している可能性が非常に高い。カラスバトは離島の常緑広葉樹林と灌木林を主な生息域とし、シイやタブ、ツバキの実等を主な食物としている。一腹の卵数は1個でその繁殖力は強くない。その為、シイやタブ等の天然林の減少がその個体数に及ぼす影響は大きい。

島の南東部では、「種の保存法」の危急種に指定されているハヤブサが一番繁殖しており、島の周辺を通過する渡り鳥などを狙ってハンティングをする様子が見られた。

春や秋の渡りのシーズンにはキビタキやオオルリ、サンコウチョウ、センダイムシクイなどが島に立ち寄り、休息、採餌している様子が観察された。5月の調査で目撃されたシマノジコは、大分県での初確認である。シマノジコはシベリア東部や中国大陸東北区に分布する鳥で、冬期、インドシナ半島や中国南部に渡る。日本が渡りのコースから外れている為、日本海側の離島での記録はあるが、太平洋側での記録は今回が初めてである。又、深島は、秋、

四国から九州へ渡るサシバの渡りのメインルートの中央にあり、島の上空では上昇気流をとらえて高度を上げ、南へ下って行くサシバの群れが見られた。

屋形島ではアオサギ、トビ、ウミネコ、ヒヨドリ、ハシボソガラスが100%の出現率を示している。

島の西部にあるスギ、ヒノキの人工林にはサギ類のコロニーがあり、繁殖活動を行っている。その為、春期、夏期、秋期にはアオサギ、ゴイサギ、コサギの優占度が高くなっている。冬期にはこれらのサギ類は島外の冬場に移動する為、姿を見かけなくなり、替わってセグロカモメ、ウミネコなどのカモメ類が優占種となる。

サギ類のコロニーは人の生活環境と接近している場合、鳴き声、臭い等トラブルの発生する場合が多い。屋形島のコロニーは人家とは隔離した場所にあり、人とのトラブルの発生する可能性のない、数少ない営巣場所である。

タブやシイの林では、繁殖期、天然記念物のカラスバトが少数ではあるが確認されており、屋形島でも繁殖している可能性がある。

海岸部の砂浜や磯では、春と秋の渡りの時期にキョウジョシギやキアシシギ、チュウシャクシギなどの旅鳥が渡りの途中で休息、採餌している様子が見られた。

葛原林道では、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ホオジロ、ハシブトガラスが100%の出現率を示している。優占度は四季を通じて、ヒヨドリ、メジロ、ウグイスが高い。

宮崎県との県境の尾根筋では「種の保存法」の絶滅危惧種に指定されているクマタカが番いで確認されており、この地域を縄張りとして生息していると思われる。クマタカは落葉広葉樹林や針広混交林などに生息する、森林性の大型のタカで山地の森林における生態系の頂点に位置する生物である。このクマタカが生息しているこの地域は豊かな自然環境が残っていると見える。しかし、森林の伐採や植林による広葉樹から針葉樹への林相の変化等により生息環境の悪化が懸念されている。自然環境の悪化の影響を一番受けやすいのは、これら生態系の頂点にいる猛禽類である。

葛原旧道では、ヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ハシブトガラスが100%の出現率を示している。優占度はヒヨドリ、メジロ、ウグイスが高く、これにエナガ、ホオジロが加わる。葛原林道と似た鳥相を示しているが、海岸部に近いだけにカケスやオオルリは出現しない。

葛原旧道、及び葛原林道で記録されたソウシチョウは、ヒマラヤ北西部や中国中、南部に分布する鳥であるが、日本に於いては飼い鳥の逃げだしたものが野生化している。九州では'81年に彦山で営巣しているのが確認されている。標高の高い所で繁殖し、冬期、平地に移動する習性があるが、今回、葛原海岸近くの林部で確認されたことから生息範囲が一段と拡大傾向にあると思われる。

葛原海岸部は、トビが100%の出現率を示し、これについてカワウ、コサギ、アオサギ、ウミネコが高い出現率を示している。名護屋湾内では魚類の養殖が盛んに行われており、その養殖生け簀の周辺ではアオサギやコサギ、ゴイサギなどのサギ類が魚の稚魚や餌を狙って集まってくる。個体数の変化は、このサギ類や集団で採餌をするカワウの出現状況によって大きく変わってくる。

海岸部ではイソシギやカワセミ、イソヒヨドリの採餌活動や、休息中のカワウの群れが見られた。冬期の湾内ではウミスズメの群れも確認された。

一般に鳥類は、夏鳥、冬鳥、留鳥、旅鳥等の生活型に分けられるが、今回、四季を通じた調査結果より、各調査地に於ける生息特性として以下のように区分し、その特徴を検討する。

居留種 : 四季を通じて見られるもの

通過種 : 渡りの途中に一時的に出現したもの

越夏種 : 春期、夏期に見られるもの

越冬種 : 秋期、冬期に見られるもの

漂行種 : 小規模の移動により出現したもの

葛原林道、葛原旧道、及び葛原海岸部は居留種の多い生息特性を示している。

屋形島は居留種が多いが、通過種の割合も若干増加する。

深島は、他の調査地と比較して通過種が多く、渡り鳥の中継地となっていることが分かる。

ま と め

(1) 深島、屋形島、名護屋地域で四季を通じた鳥類の生息調査を行い、13目29科5亜科75種の鳥類を確認した。

(2) 大分県全体の目別種数構成と比較すると、スズメ目とワシタカ目の構成比が高く、チドリ目とガンカモ目が低くなっている。

(3) 深島では国の天然記念物で、「種の保存法」の危急種に指定されているカラスバトの繁殖期に於ける出現率が高く、島内で繁殖している可能性が非常に高い。又、「種の保存法」の危急種に指定されているハヤブサが一番繁殖している。

(4) 深島での鳥類の生息特性を見ると、通過種の割合が高く、豊後水道を通過する渡り鳥の中継地となっている。

(5) 屋形島にはサギのコロニーがあり、アオサギ、コサギ、ゴイサギなどが繁殖している。又、カラスバトが繁殖期に確認されており、屋形島でも繁殖の可能性がある。

(6) 名護屋地域の森林部では、「種の保存法」で絶滅危惧種に指定されているクマタカが番で確認されており、この地域に生息していると思われる。

(7) 名護屋湾では、魚類の養殖生け簀周辺にサギ類が魚の稚魚や餌を狙って集まっており、人の生産活動との関わりが懸念される。

参 考 文 献

武石干雄、財津博文 1985 日豊海岸地域の鳥類 日豊海岸国定公園学術調査報告書大分県

大分県 1982 大分県の野鳥

高野伸二 1982 フィールドガイド日本の野鳥 日本野鳥の会

日本鳥類保護連盟 1988 鳥630図鑑

小林桂助 1980 原色日本鳥類図鑑 保育社

清棲幸保 1966 野鳥の辞典 東京堂出版

相賀昌宏 1992 自然大博物館 鳥類 小学館

松田道生 1985 野鳥の調査 東洋館出版社

大分県野鳥友の会 1986 昭和61年度鳥類生息調査報告書(クマタカ)

大分県野鳥友の会 1988 昭和62年度鳥類生息調査報告書 (カラスバト)

大分県野鳥友の会 1992 大分県内で観察された野鳥 20周年記念誌

日本野鳥の会大分県支部、他 1989 四国から九州に渡るサシバの渡りルート
S t r i x Vol. 8 日本野鳥の会研究センター